

大伴家持の独詠歌におけるメトニミー

トマーシュ・キクタ*

多文化が共生できる社会のためには、二つの要素が不可欠だと私は思う。その一つは他文化の「他」を知ることだ。つまり、他文化のどこが違うか、どういうふうに違うか知ることが大事だ。もう一つの要素は他文化を持つ人は私と同じように、第一に人間であるということの認識だ。このような文化知識と人間性の認識を深める物として、他文化が産んだ優れた文学が挙げられる。

この発表では、万葉集の編集者の一人とされる大伴家持のいくつかの歌を挙げ、その歌の中で働いているメトニミーについて簡単に述べたい。家持の歌を2組に分け、その中で働いているメトニミーが日本人でない読者が歌を鑑賞するために、どうやって他文化の知識を必要とするか、どうやって他文化の持ち主としての日本人の人間性を強調するかについて、明らかにしたい。

まず、私がメトニミーと言うのは、それは認知言語学で指摘されている、いわゆる「概念メトニミー」である。つまり、我々が頭の中で抱く概念システムでは、一つ概念を使い、それと緊密な関係にある別の概念を想起させるということが、概念メトニミーである。例を挙げよう：

この間の事件に対して、東京はどんな態度をとるか

この例文の「東京」は、もちろん「日本の政府」という意味を持つ。日本人（日本のことを知っている人）は頭の中で「日本の政府」という概念を持っている。その概念は様々な部分から成っている。

例えば、「政府の構造」や「政府の義務」などである。「政府の所在地」というのもそのような部分の一つである。なお、「東京」という部分を使い、「日本の政府」という全部の概念を想起させることはメトニミーである。つまり、この例文の「東京」という言葉は、メトニミー自体ではなく、頭の中でのメトニミーという概念上の活動による言語的な表現である。

言語的な表現として現れる概念とそれに想起させられる概念の間には、様々な関係がある。私は、文化知識と人間の体験を必要とするメトニミーが働いている家持の歌の鑑賞について述べたい。まず、文化知識を利用するメトニミーの歌を挙げよう¹：

1) 巻6-1037 番：

今造る 久邇の都は 山川の

さやけき見れば うべ知らすらし

(今造る 久邇の都は 山も川も すがすがしいのを見ると 都を作られるのも当然らしい)

2) 巻17-3900 番：

織女し 舟乗りすらし まそ鏡 清き月夜に
雲立ち渡る

(織女が 舟を漕ぎ出すらしい まそ鏡 清い月夜に 雲が立ち渡っている)

3) 巻19-4142 番：

春の日に 萌れる柳を 取り持ちて 見れば
都の 大路し思ほゆ

(春の日に 芽ぶいた柳を 取り持って 見ると 都の 大路が思われる)

4) 巻20-4334 番：

*カレル大学大学院生

海原を 遠く渡りて 年経とも

児らが結べる 紐解くなゆめ

(海原を 遠く渡って 年経ても 妻が結んだ
紐を解くな決して)

1) の歌の深い鑑賞のためには、神道に関する知識が必要である。「神道」という概念には、清い水や美しい山などが神の存在の証であるという概念上の部分がある。そこで、この歌のすがすがしい山か川は、ただ美しい自然の描写ではなく、メトニミーとして神の存在とそれに相応しい所を表している。

2) の歌の鑑賞は七夕という節句に関する知識を必要とする。当時の人たちの抱いていた「七夕」という概念には、織姫か彦星が舟に乗り、銀河の向こう岸に移るとき、その水のしぶきとして霧(雲)が立つという部分があった。その知識がなければ、歌の中の「雲」と「舟乗り」の関係はわかりにくい。

3) の歌で働くメトニミーは2) の歌のメトニミーに似たものである。奈良の都に関する知識がなければ、柳の枝がなぜ具体的に大路を思わせるかわからない。「奈良」という概念には、「大路」という部分もあった。また、その部分の特性として、「柳が植えてある」という部分もあった。そうした知識があれば、読者はこの歌の深い鑑賞ができる。

4) の歌の意味がわかるには、恋人たちが恋愛の誓いとして相手の紐を結ぶという習わしを知ることが不可欠である。「紐を結ぶ」という概念はメトニミーとして「恋愛」という概念を想起させるため、歌の中の「紐解く」とは、うちで待っている妻のことを忘れることのメトニミーである。

以上の歌で働くメトニミーは文化知識を利用するものである。そのような歌を翻訳するとき、日本人でない読者のために、その知識を注などで補う必要がある。このように、他文化の産んだ文学が文化の異なる人々の互いの理解を助ける。

次に、人間の体験を利用するメトニミーの働く

歌を見てみよう：

5) 巻 20 - 4335 番：

今替はる 新防人が 舟出する 海原の上に
波な咲きそね

(今交替する 新防人の 舟出する 海原の上に
波よ荒れるな)

6) 巻 3 - 464 番：

秋さらば 見つつしのへと 妹が植ゑし
やどのなでしこ 咲きにけるかも

(秋が来たら 見て私を偲んでといって 妻が植
えた 庭のなでしこの 花が咲いたことだ)

7) 巻 19 - 4291 番：

我がやどの いささ群竹 吹く風の

音のかそけき この夕かも

(我が家の 幾ばくもない 群竹に 吹く風の
音のかすかな この夕方よ)

5) の歌にある「波な咲きそね」とは、読者にメトニミー的に「悪い天気」という概念を想起させる。「悪い天気」という概念には、例えば次のような部分がある：「気温が下がる」「風が強くなる」「波が立つ」。そのため、荒れる波という概念の部分が全部の概念を想起させる。このメトニミーは、文化知識を必要とせず、人間の普遍的と言える、天気に関する体験を利用している。

6) の歌で感じられる悲しみもメトニミーによるものである。家持はこの歌で上手に人間の物語能力を使っている。歌の中の女性は過去のある時点に物語を作った。その物語の最後の段階として、家持のために植えた花が咲き、彼はその美しさを鑑賞しながら彼女を偲んでいる。歌の詠まれた時点に現実になったその最後の段階は、「彼女の想像物語」という概念の部分として、その概念の別の部分を想起させている。そして、その他の部分は、もういない彼女の楽しみにしていた笑顔などが含まれているため、極めて悲しいメトニミーになる。

7) の歌では、知覚のメトニミーが働く。この歌を読めば、自分の庭で微かな風の音を夕方に味

わう話し手が想像される。しかし、実際に「私が庭にいて、風の音を聞いている」という言葉は一つもない。ならば、読者はどうやって理解に至るのだろうか。答えは、知覚メトニミーである。「知覚」という概念は、最低二つの部分から成っている。それは、「知覚する存在」と「知覚される現象」である。この歌の場合は、知覚されるかすかな現象がメトニミー的に知覚する敏感な存在という概念を想起させる。これも、文化知識と関係なく、人間の体験を必要とする鑑賞である。

以上の二つの歌の組で見たように、文化知識を必要とする歌を鑑賞するためには、翻訳などでその知識を加えると、読者の他文化への理解を一層深めることができよう。そして、人間の、だれもが持つ体験だけを必要とする歌の鑑賞は、読者に他文化を持つ人の人間性を気づかせ、強調させよう。

註

- 1 歌および現代語訳は、佐竹昭広・木下正俊・小島憲之校注・訳『万葉集』全四冊（『日本古典文学全集』2～5）小学館、1971～75による。